

伊丹市埋藏文化財調査概報Ⅰ

1992年3月

伊丹市教育委員会

序文

伊丹の地は、伊丹台地と武庫川・猪名川によって形成された沖積平野から構成されており、そのところどころには、先人の足跡を偲ばせる文化財が存在しています。とくに、伊丹台地上には、わが国城郭史上、はじめての惣構をもつ城として知られている有岡城が存在していました。

有岡城跡の調査は、昭和50年に行われた主郭部の調査が最初であります。その後、有岡城跡主郭部に隣接する地域において、国鉄伊丹駅前地区市街地再開発事業が計画され、事前に発掘調査が行われました。この広範囲な調査が契機となり、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査が見直され、開発事業に伴うものの調査のみにとどめず、個人の住宅建築等に関係するものについても積極的に調査を実施し、埋蔵文化財の保護を図ることとしました。

今回の調査は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡内の個人住宅建築に伴うものであり、国宝重要文化財保存整備費国庫補助金を受けて実施したものです。

この埋蔵文化財調査概報は、伊丹市教育委員会が昭和61年度から平成2年度に実施した、個人住宅の建築に伴う発掘調査のうち、5調査区をまとめました。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位のみなさまに心より厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一雄

例 言

- (1)本書は兵庫県伊丹市伊丹1丁目を中心とする、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の個人住宅建設に伴う発掘調査成果をまとめたものである。
- (2)発掘調査は、国庫補助事業として、伊丹市教育委員会が実施した。
- (3)発掘調査は、昭和61年度から平成2年度までに実施したもので、そのうち5調査区について報告する。

第61次調査 昭和63年4月27日～6月2日

第73次調査 平成元年3月6日～3月7日

第86次調査 平成2年3月10日～3月31日

第87次調査 平成2年4月14日～4月24日

第100次調査 平成3年2月20日～3月31日

- (4)発掘調査は、伊丹市教育委員会 小長谷正治・中井秀樹（現 三田市教育委員会）があたり、田中賢人（現 三田市教育委員会）、伊藤秀樹がこれを補佐した。
- (5)整理調査は、平成3年10月から平成4年2月まで実施した。
遺物の実測は、三輪隆子・岡野理奈、トレースを沖高広子が担当した。
- (6)本書の編集・執筆は、伊丹市教育委員会 小長谷正治・細川佳子が担当した。
- (7)本遺跡の資料は、伊丹市教育委員会に保管されている。
- (8)発掘調査及び整理調査の過程で、村川行弘（大阪経済法科大学教授）、藤井直正（大手前女子大学教授）、川口宏海（大手前栄養文化学院講師）各氏のご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表する。

目 次

I	遺跡の概要	1
II	調査の概要	3
III-1	第61次調査	5
III-2	第73次調査	10
III-3	第86次調査	13
III-4	第87次調査	18
III-5	第100次調査	21
IV	まとめ	27

I 遺跡の概要

位置と環境 伊丹市は兵庫県の東南部に位置し、東は大阪府池田市・豊中市に隣接し、南は尼崎市を経て大阪湾まで約10kmの距離にある。西を六甲山地、北を長尾山地、東を千里丘陵で囲まれた西摂平野の北方、盆地状になったところである。市の中央部には、長尾山地に端を発する伊丹台地（洪積台地）が南に向かって長くのび、西の武庫川、東の猪名川によって狭まれている。

有岡城跡は、伊丹台地の東縁にあたり、標高は15～20mである。東側に広がる猪名川低湿地帯との比高差は5～10mで崖をなす。規模は、東西0.8km、南北1.6km、南北に長い不整形である。また、有岡城跡の中央には南北に通じる有馬道、北へ約1kmの地点には西国街道が通り、交通の要所でもある。

伊丹城 伊丹城は、土豪伊丹氏の居館として、文和2年（1353）の「森本基長軍忠状」に初見される。応仁の乱後、伊丹城は度々戦乱を経験する。永正11年（1568）織田信長が上洛すると、伊丹親興は信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正とともに、摂津国の三守護に任じられた。

有岡城 天正2年（1574）、池田氏の家臣より台頭してきた荒木村重は、伊丹親興を破り、摂津守となり、伊丹城に入城した。信長の命で「有岡城」と改名し、また、城下町をも堀と土塁で取り囲む「惣構」構造とした。惣構の要所を守ったのが、岸の砦、上蔭塚砦、鶴塚砦である。天正6年（1578）、石山本願寺攻めの時、村重は信長に謀反の疑いをかけられ、大軍に包囲され、1年あまりの攻防の末、天正7年11月に落城する。村重の後、有岡城は池田信輝の嫡子之助が領有するが、天正11年（1583）、美濃に転封され、廃城となった。

伊丹郷町 廃城後、商工業者の住んでいた城下町は発展した。文禄年間（1592～96）までに、伊丹村内に魚屋町・材木町・竹屋町など15の町が成立し、寛文年間（1661～73）には17町、元禄年間（1688～1704）には24町にふえ、享保年間（1716～36）までには27町が成立した。これらの町（伊丹村）を中心として、周辺の大広寺村・北少路村・昆陽口村などの15ヶ村が一続きになって、伊丹郷町を形成していった。また、これらの村は、初めは幕府の直轄領で、寛文元年（1661）に、15ヶ村のうち10ヶ村が、正徳元年（1711）からは12ヶ村が近衛家領となっている。

伊丹郷町は、酒造業や運送業などで発達した。特に酒造業は享保15年～宝

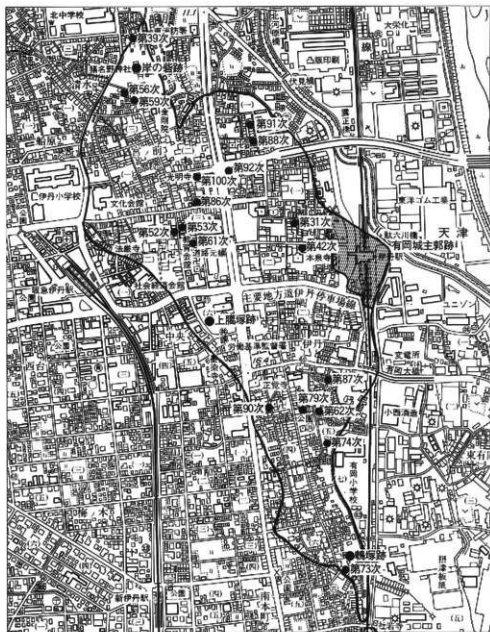


図1. 調査地点図(有岡城跡惣構図) 1/10,000

暦5年(1730~55)が第1のピークである。その後、灘の酒造業が台頭したため減少したが、近衛家の保護もあり、享和3年~文政2年(1803~19)第2のピークをむかえる。有力な酒造家たちの間ではその財力に支えられて俳諧が流行し、俳人の上島鬼貫を輩出した。また、頼山陽などの文人も伊丹郷町を訪れた。

II 調査の概要

国庫補助事業の開始 伊丹市が国庫補助を得て、個人住宅建設等に伴う発掘調査を始めたのは昭和61年度である。その頃の伊丹市では、有岡城惣構の中の2箇所において規模の大きな市街地再開発事業が進み、「遺跡の保護と開発」の問題がクローズアップされていた。また、再開発事業の影響は周辺に及び、個人住宅の建替えや共同住宅建設が一段と増加した時期でもある。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡 有岡城惣構は、南北1.6km、東西800mの範囲に及び、惣構の東辺中央部に本丸のある主郭部、北端に岸ノ砦、南端に鶴塚砦、そして西辺中央部に上藤塚砦が配されている。主郭ほか一部が国史跡に指定されているが、大半は未指定で開発の対象となっており、市内で最も頻繁に発掘調査を実施する地域である。別表(表1)の発掘調査例は、すべて有岡城跡・伊丹郷町遺跡関係の国庫補助事業を表わしている。昭和61年度から平成2年度までに実施した国庫補助による発掘調査は20件あるが、この内、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に関するもの19件で、残り1件が伊丹廃寺跡関係の発掘調査である。

伊丹廃寺跡 国庫補助事業として実施する個人住宅建設等に関する発掘調査が、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に集中する傾向は、今しばらく変わらないと思われるが、伊丹廃寺跡関係の発掘調査や御願塚古墳に関する発掘調査が、今後増加してくるものと考えられる。

御願塚古墳 御願塚古墳は、昭和62年に行なわれた外提部の発掘調査で、二重濠であったことが確かめられたが、この外側の周濠は全て民家の下に位置するため、今後住宅の増改築や新築工事に伴って発掘調査を実施する機会が多くなると思われる。

次数	調査地点	調査期間	面積	調査原因・調査内容
31	伊丹1丁目	昭和61年9月1日 ～18日	100m ²	国鉄伊丹駅前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査。内郭を西する堀、江戸時代から近代に至る町屋跡。水琴窟出土。
39	清水2丁目	昭和61年11月10日 ～11月17日	13m ²	堀跡整備に伴う規模確認調査。第25次調査で検出した外堀の西側の壁面、底面を検出。外堀に接し、西北へ延びる形状の遺構を確認。
42	伊丹1丁目	昭和62年1月15日 ～1月18日	55m ²	国鉄伊丹駅前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査。東西に延びる堀状遺構の南側河部と底面を検出。

表1. 国庫補助事業としての発掘調査一覧表

次数	調査地点	調査期間	面積	調査原因・調査内容
52	中央2丁目417-2	昭和62年9月24日 ～10月20日	50m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。井戸、カマド、土坑など近世以降と思われる遺構が検出。
53	中央3丁目388-7 地	昭和62年9月24日 ～10月20日	100m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代から明治時代に至る遺構面が3面検出された。地割溝、土坑、礎石など検出。
56	宮の前3丁目5-1	昭和62年11月16日 ～11月20日	27m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。近代以降の土坑、江戸時代以降の土坑、江戸時代の耕作土を確認。
59	宮の前3丁目10-4	昭和63年2月4日 ～2月10日	24m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代後半の土坑検出。
61	中央3丁目2-29	昭和63年4月27日 ～6月2日	90m ²	道路拡幅工事及び住宅兼病院建設に伴う確認調査。中世頃と思われる掘立柱建物跡、江戸時代の町屋跡。
62	伊丹5丁目7-26	昭和63年4月27日 ～5月7日	30m ²	共同住宅建設に伴う確認調査。有岡城期の溝、江戸時代の礎石、土坑、ピットなど検出。
73	伊丹7丁目3-25	平成元年3月6日 ～3月7日	10.2m ²	管渠における遺跡の範囲・性格を追求するための確認調査。江戸時代の土坑・埋溝・埋ガメを検出。円筒・形象形埴輪が出土。
74	伊丹5丁目672-1	平成元年3月8日 ～3月23日	50m ²	伊丹台地東縁部における土塁跡の確認調査。江戸時代の町屋跡、近世以前の掘立柱遺構、伊丹台地が東側段丘下へ傾斜する旧地形を確認。
79	伊丹5丁目686-8	平成元年7月3日 ～7月13日	28m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代末の土坑、井戸、建物基礎、伊跡など検出。
86	宮の前2丁目192-3	平成2年3月10日 ～3月31日	70m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代の掘立柱建物跡、かまど、土坑、小穴など検出。
87	伊丹5丁目648-6	平成2年4月14日 ～4月24日	45.3m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。鎌倉時代から室町時代に至る遺構遺物を検出。伊丹城跡の時期(15世紀代)の地割と考えられる溝検出。
88	北本町1-79	平成2年7月4日 ～7月6日	30m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代末頃の柱穴、土坑、埋溝、杭跡など検出。
90	伊丹4丁目726-1	平成2年9月22日 ～9月27日	24m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代中期以降の火災処理土坑、柱穴、礎石、埋溝、土坑など検出。火災の跡が火災面、火災処理土坑でうかがえる。
91	北本町1丁目56	平成2年9月28日 ～10月2日	21m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。中世の時期と思われる柱穴、江戸時代後期の掘立柱建物跡、柱穴、埋溝、杭跡、土坑など検出。
92	伊丹1丁目332-5	平成2年10月17日 ～10月19日	7.5m ²	個人住宅建設に伴う確認調査。江戸時代以前の土坑検出。瓦器類、輸入陶磁器(龍泉窯系瀬丹文青磁碗)出土。
100	宮ノ前2丁目200	平成3年2月20日 ～3月31日	408m ²	産屋建設に伴う発掘調査。光明寺創建期(天正年間)以降の寺院関係の遺構、2度の火事跡検出。

表1. 国庫補助事業としての発掘調査一覧表

Ⅲ-1 有岡城跡・伊丹郷町 第61次調査

所在地 伊丹市中央3丁目2-29
 調査面積 90m² (東西6m・南北15m)
 調査期間 昭和63年4月27日～6月2日



図2. 調査地点図(1/2,500)

調査概要 今回の調査は、病院建替え工事に伴って実施した。調査範囲は敷地全域にわたるものでなく、一部の調査に留められたため、検出した江戸時代の建物跡等については、その全容を明らかにすることはできなかった。出土した遺物は、江戸時代初期から幕末に至る江戸時代全般にわたるもので、伊丹郷町成立初期からの町場であったことが判明した。

調査に際しては、表土を取り除いた段階で礎石建物等を検出したため、一旦その面で遺構



調査区全景(第Ⅰ期)



調査区全景(第Ⅱ期)

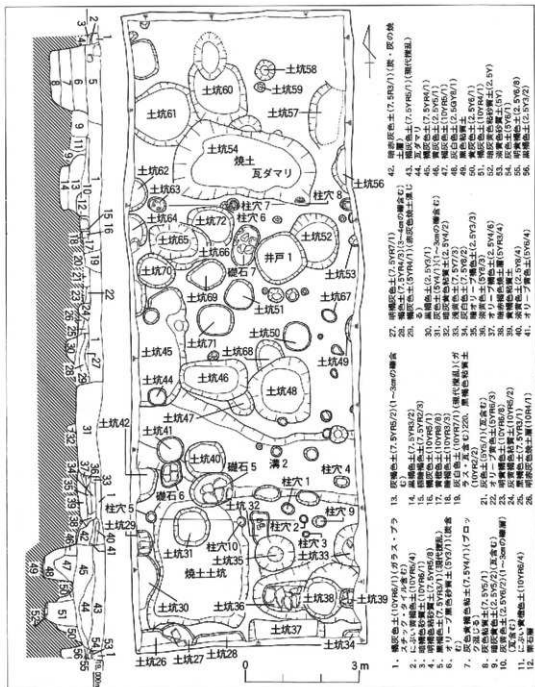


図3. 第61次調査 東壁土層図(左)、第I期遺構図(右)

を検出(第II期遺構面)し、その後地山まで掘り下げてさらに古い遺構の調査(第I期遺構面)を行なった。出土した遺物により、古い第I期の遺構面は17世紀初頭~18世紀、第II期遺構面は19世紀以降と考えられる。

遺構 遺構の中で最も古いと考えられるものは、柱穴の並びである。南側に一列（柱穴5・10・9）と北に一列（土坑63・柱穴7・8）が2m～2.3mの間隔で並ぶ。遺物の出土は無かったが、中世まで遡ると考えられる。江戸前期の遺構に溝2がある。溝2は、幅1.5m、深さ30～40cmの規模をもち、調査区を東西に横切る。溝内からは、唐津焼砂目積の皿が出土している。

調査区南側には、土坑の内部に多量の焼土が堆積する焼土土坑がある。また同様の土坑が、北側（土坑54）からも検出され、内部に焼けた瓦と壁土が埋め込まれていた。このような土坑は、伊丹郷町の各所で発見されており、火災後の残滓を処理した跡と考えられているものである。江戸時代の記録によれば、元禄元年（1688年）に同町より出火し、160軒を焼亡した大火事がおきている。焼土土坑からの出土遺物は少ないが、この火事によるものと考えられる。

第Ⅱ期の遺構では、礎石建物が1棟検出された。それは礎石9～15から成り、奥行4間の建物と考えられ、間口については、さらに西側に広がるものとみられる。また礎石10から奥に向かって、16～17と結ぶ建物が連らっていたものと判断される。奥の建物には、北東隅部分に竈1が設けられ、その南側からは戸外に向かって延びる溝1（排水施設）が掘られている。建物の外に

は井戸1があることから、奥の建物には炊事場が設けられていたものと考えられよう。井戸の周辺から建物の北側にかけては、ゴミ穴が多く掘られている。これは家庭内に生じる不用物を、敷地内（裏庭等）に処分した跡とみられる。

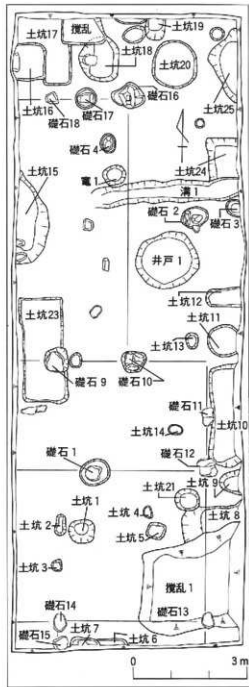


図4. 第Ⅱ期遺構図

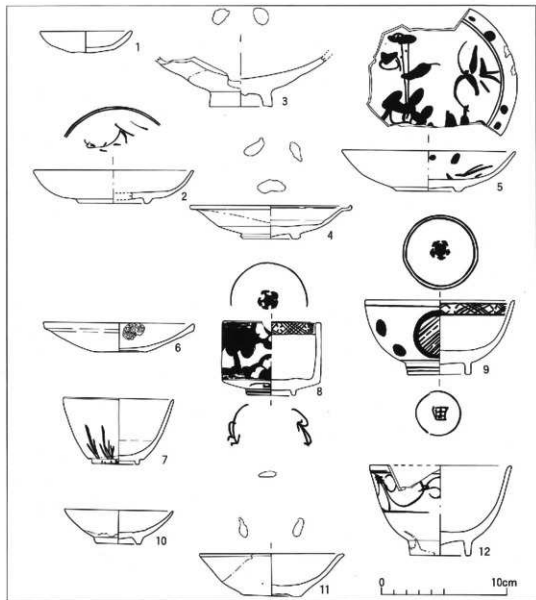


図5. 第61次出土遺物

出土遺物 1～9は第Ⅰ期遺構面から検出した遺構からのもので、1～5は溝2より出土した。1は完形の土師皿（灯明皿）で、口径7.2cm、器高1.7cm。手捏ね成形で、底部はゆるやかな丸みを持ち、口縁部は上方に内弯気味に立ち上がる。色調は灰白色で、内外面口縁部に煤が付着している。内面底部は一定方向のナデ調整、内外面口縁部は横ナデ調整、外面底部は指頭圧調整である。2と5は肥前染付磁器皿で、2は推定口径12.6cm、器高2.65cm、高台径5.6cm、高台端面は軸を削りとり、砂が付着している。体部は内弯気味に

立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。内面見込みには二重圏線の中に草花文の染付が施してある。5は推定口径13.8cm、器高3.25cm、高台径5.2cm。2と同様に高台端面は軸を削りとり、砂が付着している。体部は内弯気味に立ち上がり、内面には草花文の染付が施してある。2は5に比べて器壁が薄く、染付の色が濃く、シャープな感じがする。3と4は砂目の唐津焼である。3は大皿で、高台径5.0cm、残存高4.0cm、高い輪高台を持つ。外面の高台周辺は無軸で、その他は明褐色の軸を施してある。胎土は橙色をしていて、密である。4は溝線皿で、推定口径12.8cm、器高2.7cm、高台径4.4cm、器高が低く扁平な形をしている。内外面共、底部から体部のほぼ同じ位置で明瞭に屈曲する。内面から外面体部上半にかけて灰白色の軸が施されている。1～5は17世紀前半から中頃のものだと考えられる。

6～9は土坑61より出土した。6は信楽焼の灯明皿で、口径12.1cm、器高2.3cm、底径4.1cm。外面底部は右回りの糸切底で、体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部でやや肥厚する。内面口縁部にはハリツケの菊文がある。内面から外面口縁部にかけて灰白色の透明軸が施してあり、細かい貫入がみられる。また、外面口縁部に煤が部分的に残っている。7は信楽焼の小杉茶碗で、口径8.85cm、器高5.3cm、高台径3.7cm。高台は削り出しで、高台脇を平坦に削り、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は直線的に斜め上方に開く。内面から外面高台脇の上方まで、淡黄色の透明軸が施してあり、細かい貫入がある。外面体部下半には鉄絵で小杉文が描かれている。8と9は肥前染付磁器である。8は筒型碗で、推定口径7.8cm、器高5.9cm、高台径3.9cm。内面見込みに五弁花文、内面口縁部に5本単位の斜格子文、外面には柳文の染付が施してある。9は碗で、口径11.8cm、器高5.95cm、高台径5.0cm。内面見込みに五弁花文、内面口縁部に4本単位の斜格子文、外面体部に丸文、高台内には不明の銘の染付が施してある。器壁は厚く、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。6～9は18世紀後半のものだと考えられる。

10は第Ⅱ期遺構面の土坑6より出土した陶器皿である。口径8.6cm、器高2.7cm、高台径3.5cm。断面逆台形の削り出しによる輪高台で、体部は斜め上方に立ち上がる。内面から外面体部にかけて、不透明な灰白色の軸が施され、内面見込みは蛇ノ目軸ハギである。胎土は灰白色で密である。

11・12は遺構外より出土したもので、11は胎土目の唐津焼皿である。口径11.5cm、器高3.4cm、高台径4.5cm、高台内の削りは浅く、高台は低い。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は外方へそる。内面から外面体部にかけて、オリーブ灰色の灰軸を施してある。17世紀前半のものである。12は肥前染付磁器碗で、口径11.2cm、器高7.2cm、高台径4.8cm。高台無軸で、外面体部上半に網目文と草花文の染付が施してある。17世紀中頃のものである。

Ⅲ-2 有岡城跡・伊丹郷町 第73次調査

位置 伊丹市伊丹7丁目3-25
 調査面積 10.2m²(東西6.8m・南北1.5m)
 調査期間 平成元年3月6日～3月7日

調査概要 今回の調査地点は、南北に長い有岡城惣構の最南端に位置する。当時有岡城には、要所に砦が設けられて守りを固めていたことが知られている。惣構の北端に岸ノ砦が、惣構西辺に上藤塚砦が、そして南端には鶴塚砦が配置され、惣構縁辺部に防衛線を築いていたのであるが、この内の鶴塚砦に推定されている場所に、今回初めて調査の手を入れることになった。

鶴塚砦は、現在でも高さ5m、径20～30mの塚として残っており、地元では「鶴塚」と呼ばれている。頂上に上がると、遠く尼崎方面から大阪方面に眺望が開け、ここに物見の施設を置いたことは十分に想像できる。おそらく、鶴塚を中心に砦が築かれたものであろう。

調査を実施した地点は、鶴塚の裾部を削って造成された宅地で、鶴塚の南側にあたる。ここに、細長いトレンチを入れたところ、地表下約40cmの地山面上において土

坑を検出した。土坑の調査を進めるうちに、江戸時代後期の陶磁器と共に埴輪片が出土した。

出土した埴輪の数は30点にのぼる。これらの埴輪は、出土場所からみて鶴塚より出土したものと推定され、それは江戸時代の後期になって、塚の裾部が削られ宅地化された折に出土したと考えられるのである。ところで昭和60年に実施した第21次調査では、上藤塚砦跡と推定される場所で、やはり古墳跡と埴輪が出土している。このような発掘例からみて、



図6. 調査地点図(1/2,500)



調査区全景

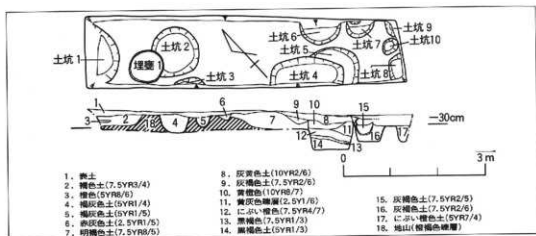


図7. 遺構図(上)、東壁土層図(下)

鶴塚砦にしても上藤塚砦にしても、古墳の墳丘を利用して、それを砦の中に取り込む様に砦が構築されたのではないかと考えられる。

今回の発掘調査は、鶴塚砦を調査する目的で実施したが、埴輪の出土によって思わぬ展開となった。伊丹市域の南側から尼崎市域の北半部にかけての一带には、かつて古墳時代中期の古墳が数多く築造されて古墳群を形成していたが、御願塚古墳などを僅かに残して消滅している。このような現状の中、新たに中期古墳を発見できたことは大きな成果と言えよう。今後は鶴塚古墳として、詳しい調査を実施する必要がある。

遺構 検出遺構は、土坑10基・埋壺1基の合計11基である。これらの遺構は、すべて江戸時代後期に構築されたものである。以下、遺物を出土した遺構について説明を加えておく。

土坑1は径1.3m以上の円形の土坑で、くらわんか手の肥前磁器碗などと共に埴輪が出土した。土坑2は、径1mの円形土坑である。やはり埴輪と共に肥前磁器碗が出土している。また、土坑2を切っている埋壺1からは、広東碗が出土した。土坑6と土坑7は、埋壺の可能性ある。

今回の調査では、砦に関する遺構は検出されなかったが、今後機会があれば追究していき、有岡城惣構の構造を明らかにしていきたい。



鶴塚砦(北側)

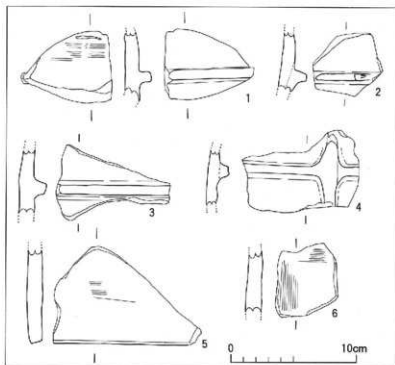


図8. 第73次出土遺物

出土遺物 1～6は土師質の埴輪で、1、4、5は土坑1より出土した。1は残存高5.7cm、厚さ1.1cm、突帯高1.0cm、突帯幅上端0.8cm、下端1.2cm。外面はヨコハケで、断面方形の突帯は貼付け後ヨコナデ調整。内面は輪積みの痕があり、ヨコハケと横方向のヘラナデ調整である。4、5は器種不明の形象埴輪と思われる、

4は残存高6.1cm、厚さ0.8cm、突帯高0.8cm、突帯幅上端0.7cm、下端1.4cm。突帯をきるように縦方向に突帯が出ているが、割れているため突帯の高さは不明である。断面台形の突帯は貼付けられ、内外面共ヘラナデ調整で、ハケの痕跡はない。5は残存高7.9cm、厚さ1.3cm、端部は平坦面をなし、内外面にヨコハケがみられる。1～5mmの白色の礫を含む。2、3、6は表土より出土した。2、3は円筒埴輪で、2は残存高5.1cm、厚さ1.1cm、突帯高0.9cm、突帯幅上端0.7cm、下端1.0cm。断面台形の突帯は貼付けられ、内面にヨコハケがみられる。3は残存高6.0cm、厚さ1.3cm、突帯高0.9cm、突帯幅上端0.8cm、下端1.6cm。断面台形の突帯は貼付けられ、内外面ともヘラナデである。6は器種不明の形象埴輪で残存高5.2cm、厚さ1.3cm。外面はタテハケとヨコハケの両方みられる。色調は3以外は浅黄橙色で、3は黄橙色である。また、全体的に磨耗が著しく、調整等の観察が不可能なものもあり、器種不明のものもある。これらは、鶴塚古墳から出土した埴輪であり、突帯高が高く、外面はヨコハケで、川西編年(川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2)のⅢ期と考えられる。

図示はしていないが、肥前染付磁器のくわんか手の碗や広東碗などが埴輪と共に出土した。その他に土人形の祠や陶器の壺などが出土した。これらは、18世紀後半から19世紀のものだと思われる。埴輪の総数は30数点にのぼるが、いずれも小片である。

Ⅲ-3 有岡城跡・伊丹郷町 第86次調査

所在地 伊丹市宮ノ前2丁目192-3
 調査面積 70m²(東西5.5m、南北13m)
 調査期間 平成2年3月10日～3月31日

調査概要 第86次調査地点は、有岡城惣構においては町屋地域にあたり、廃城後の江戸時代には、その初期の段階から町場に含まれている。伊丹郷町を描いた古絵図(文禄伊丹之図・寛文九年伊丹郷町絵図)によれば、郷町内にまだ空地(畑か)多いにもかかわらず、当地点を含めたこの周辺には家並が描かれている。おそらく、有岡城惣構当時から続いて町屋が営まれていたものであろう。

当地点の東側に隣接した敷地には、国の重要文化財に指定された旧岡田家住宅がある。



図9. 調査地点図(1/2,500)



調査区全景(第Ⅰ期)



調査区全景(第Ⅱ期)

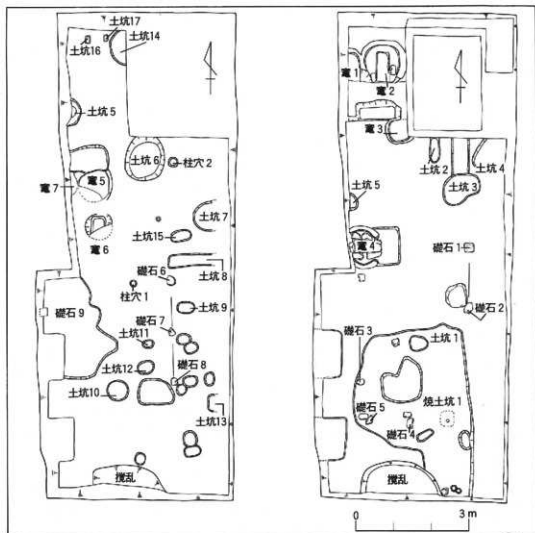


図10. 第86次第Ⅰ期遺構図(左)、第Ⅱ期遺構図(右)

旧岡田家住宅は延宝二年(1674年)の建立で、江戸中期に酒蔵を増築して以降は酒造蔵として使用されたものである。今回の調査地点は、この酒造蔵の敷地の一画にくだんだ約100m²の土地である。

遺構 発掘調査の結果、二面の生活面が存在することが判明した。上層の面(第Ⅱ期遺構面)は東壁上層図(図11)でみると、第22・23層の上面となり、下層の面(第Ⅰ遺構面)は第23層の上面となる。第Ⅱ遺構面上には焼土層(第19層)が堆積している。以下、各遺構面ごと遺構の説明を加えておくと、遺構によっては、さらに上層より掘り込まれたと判るものがあり、確実なその面の遺構と分けて説明する。

第Ⅰ遺構面 この面に属する確実な遺構は、礎石6～8である。柱間寸法は1.3mの等間

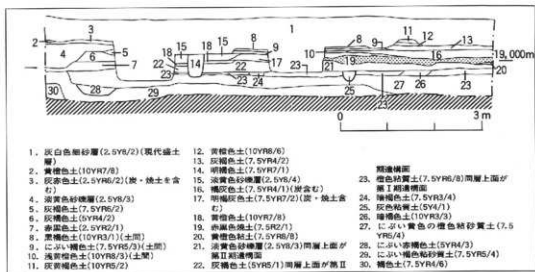


図11. 第86次東壁土層圖

階で、2間分が遺存していた。礎石は、長さ25cm・厚さ15cm程度の小型の河原石を使用し、平坦面を上にして設置されている。これと直接の関連しないが、西壁際に五輪塔を転用した礎石9がある。竈は3基検出されたが、このうち竈6は、上層より掘り込まれたもので、この面の竈は5と7である。竈は土間を若干掘り込んで構築された半地下構造を呈し、焚口は方形に掘り込んでいる。第I遺構面の時期は、出土遺物によれば17世紀前半を下限とすることができよう。

第II遺構面 この面の遺構には、礎石・竈・焼土土坑がある。礎石は2箇所に残るのみで、建物を構成していたか否かは不明である。礎石1と2の間隔は1.6mである。礎石1は五輪塔の火輪を逆に置いて使用したものである。竈は4基検出された。竈1・2は2連基の半地下構造をもち、径90cmで残存高は60cmを測る。竈の底面は浅く溝状に窪み、溝の両側面には石を設置している。この溝は、灰の掻出しと通風のためのものであろう。竈3は単独で検出された。径55cm、深さは30cmである。竈4は竈1・2と同様の構造を持つが、単基である。径は90cm、残存高は25cmを測る。

第II遺構面は、火災を受けたと考えられ、調査区の南側には1辺3mほどの浅い焼土溜まりが残っている。また、同面には、部分的に厚く焼土が堆積しており、第II遺構面は火災によって終結したものと考えられる。

遺物の出土量は少ないが、焼土土坑や焼土層中より出土した遺物により、17世紀前半頃に火災にあい建物等が焼失したと考えられる。このことから、第II遺構面の存続期間は、極めて単期間で、火災後は速やかに整地されたものと判断される。

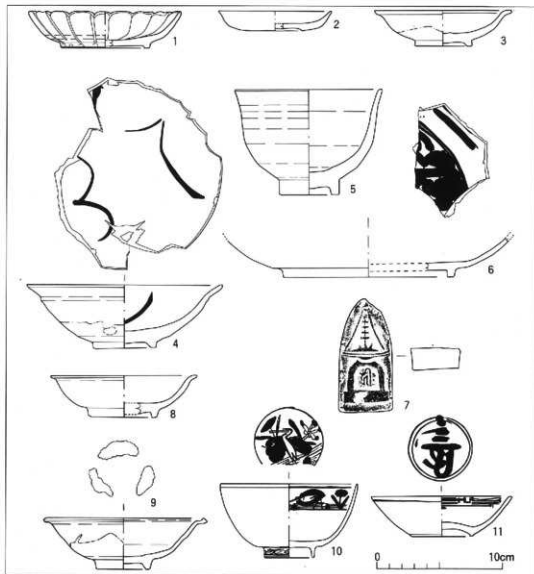


図12. 第86次出土遺物

出土遺物 1、2、6は焼土土坑1より出土したものである。1は瀬戸・美濃焼菊皿で、推定口径12.2cm、器高2.9cm、高台径7.0cm。内面は型押し成形で、外面は削ぎを入れている。高台内は無釉で、他は淡黄色の長石釉が施されている。2は陶器皿で、推定口径9.0cm、器高1.6cm、萁筒底で、底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。外面底部から体部は回転ヘラ削りで、外面口縁部から内面にかけて回転ナデ調整である。全面に暗オリーブ色の釉が施されている。胎土は黄灰色で密である。6は中国製青花皿で、推定高台径13.6cm、残存高3.2cm、高台端面の釉を掻き取らず、端部と外面に砂が付着して

いる。内外面に貫入がある。胎土は淡橙色である。粗製の陶胎磁器である。1、2、6は17世紀前半のものと考えられる。

3～5、7は焼土層(図11、19層)より出土したものである。3は唐津焼の灰釉皿で、推定口径10.8cm、器高2.85cm、高台径4.65cm。削り出しによる輪高台で、高台内の削り込みは浅い。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。内面から外面体部にかけて暗オリーブ色の釉が施されている。胎土は浅黄橙色で粗である。4は絵唐津皿で、推定口径15.6cm、器高5.15cm、高台径5.0cm、削り出しによる輪高台で、体部は高く内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内面から外面体部上半にかけて黄褐色の釉を施している。外面体部下半に釉がたれている。内面に鉄絵で草文が描かれている。5は唐津焼碗で、推定口径15.6cm、器高8.4cm、高台径4.5cm。高台は削り出しによる高い輪高台で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反する。高台は無釉で、他は明褐灰色の釉が施されている。7は無釉の陶器、型押し瓦塔で、長さ9.0cm、幅4.3cm、厚さ1.7cm、にぶい橙色をしている。宝塔を表し、法華経にかかわる遺物で、中世的なものである。3～5は17世紀前半のものと考えられ、7は時期不明である。

8～10は第Ⅱ期遺構面より出土したものである。8は中国製白磁端反り皿で、推定口径11.6cm、器高3.3cm、高台径5.5cm、高台は無釉である。器壁が厚く、釉の発色がにぶいので、粗製のものだと思われる。9は砂目の唐津焼溝縁皿で、推定口径13.0cm、器高4.1cm、高台径4.3cm。削り出しによる輪高台で、底部から体部への屈曲は内外面共に明瞭である。口縁部の水平面と内面の上方への突出を削り出して表現し、端部は内傾する面をなすように面取りされる。内面から外面体部上半にかけて灰オリーブ色の釉が施されている。10は中国製青花碗で、推定口径10.8cm、器高5.9cm、高台径3.8cm。底部から丸みを帯びて立ち上がった体部は比較的直線的に口縁部へのびていく。内面は平らな底部を持ち、見込みには鷲と草花文の染付があり、内面口縁部には草花文の染付があり、高台外側面には染付文様帯がある。8～10は17世紀前半のものと考えられる。

11は重機堀削時に出土した中国製青花皿で、口径11.2cm、器高3.2cm、底径4.5cm。萐筍底で、体部はやや内弯気味に斜め上方に立ち上がる。内面は饅頭心で、見込みには二重圏線の中に寿文の染付があり、内面口縁部にはくずれた四方棒文の染付が施されている。呉須の発色は10の青色に比べるとにぶい。外面底部に砂が付着している。明末のものと考えられる。

第86次調査地点では、遺構からの出土遺物は少なく、その大部分は、各遺構面の基盤となっている包含層からの出土が多い。

Ⅲ-4 有岡城跡・伊丹郷町 第87次調査

所在地 伊丹市伊丹5丁目648-6
 調査面積 45.5m (東西3.5m、南北13m)
 調査期間 平成2年4月14日～4月24日

調査概要 第87次調査地点は、有岡城主郭の南側に位置し、その距離は約300mである。有岡城惣構の構造は、東端の中央部に主郭があり、その西側は大溝(堀)と土塁によって内郭と外郭に区画されるというものである。内郭は侍屋敷、外郭には町屋が建てられていたと考えられ、今回の調査地点はその内郭の南端部に相当する。

遺構 調査範囲の土層の堆積は薄く、地表下30～40cmで地山面となる。検出遺構はすべてこの地山面において確認した。遺構には、掘立柱建物、柱穴列、溝、土坑、埋桶、埋窆、杭列がある。

掘立柱建物 調査区の北側に位置し、東西1間(1.8m)・南北2間(3.7m)分が検出された。調査区が狭いため、東・西・北に広がる可能性を残している。同建物の柱穴13は溝1を切っている。柱穴内部より、近世陶磁の破片が出土した。

柱穴列 調査区南側において2列存在するが、柱間が異なるので関連しないと考えられる。時期は不明である。

溝 調査区中央部を東西方向に延びる3条の溝(1～3)と、南側で南北に延びる溝4が検出された。溝1は、幅80cm～1.15m、深さは10cmを測り、西に向って傾斜する。出土遺物には、鎌倉時代の瓦器碗片がある。溝2は、幅1.1～1.2cm、深さ35cmを測る。遺物は土師皿と天目碗が出土している。時期は16世紀後半頃と考えられる。溝3は、幅20～



図13. 調査地点図(1/2,500)



調査区全景

30cm、深さ10cmの小規模は溝である。遺物は出土しなかったが、埋土は溝2と同じであることから、時期的に近いものであろう。溝4は、幅20cm、深さ5cmの規模で、溝3近くで立ち上がる。時期は不明である。

土坑 土坑は24基が検出された。遺物の出土は極めて少なく、時期の判明するものは少ない。しかし、埋土から判断すると、江戸時代以降と考えられるものが多く、中世に遡るものは僅かであろう。

埋桶 埋桶（埋桶1・2）は東壁に沿って2基並んだ状態で検出された。2基ともに溝2を切っている。埋桶1には底面に桶の底板が遺存していた。掘方の径は60cm、深さは20cmを測る。埋桶2は、径67cm、深さ25cmを測る。遺構の時期は明治時代と考えられる。

埋瓦 西壁際に1期が検出された。上部が既に失なわれている。瓦の底部中央が穿孔されている。時期は明治以降と考えられる。

有岡城惣構内部の調査については、これまでに数多く実施されているが、中世の遺構を調査する機会は極めて稀である。溝1～溝3の性格についても、敷地境の溝であるのか、田畑の灌漑用であるのか、今のところ判断できないが、柱穴8から16世紀頃の羽釜片が出土しているところを見ると、屋敷地の一画を調査したという感がある。

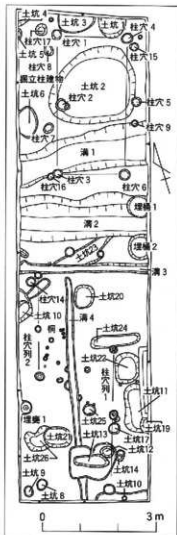


図14. 第87次遺構図

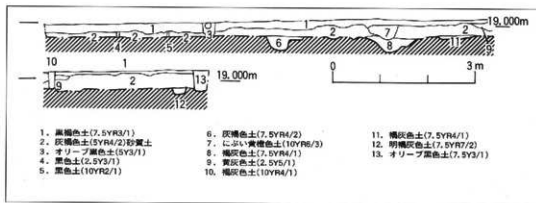


図15. 第87次東壁土層図

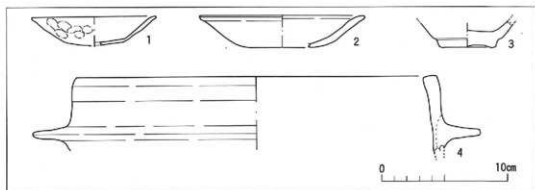


図16. 第87次出土遺物

出土遺物 1～3は溝2より出土した。1と2は手捏ね成形の土師皿である。1は推定口径10.0cm、残存高2.3cm。ほぼ平底で、体部が斜め上方へ直線的に伸び、口縁部の下で体部はやや肥厚する。色調は浅黄橙色である。内面は横ナデ調整、外面は底部から口縁部の端まで指頭圧調整で、ナデ調整はしていない。胎土は密で、少量の雲母を含んでいる。2は推定口径13.2cm、残存高2.6cm。ほぼ平底と思われ、体部が斜め上方へ直線的に伸び、口縁部の端を外方へつまみ出したようなものである。色調は浅黄橙色である。調整は磨耗しているため、内外面共不明である。胎土は密で、少量の雲母を含む。3は瀬戸・美濃焼天目茶碗で、高台径4.4cm、残存高2.2cm。高台は削り出しによる輪高台で、高台内の削りは非常に浅い。高台脇は回転ヘラ削りで、体部は斜め上方に伸びていく。内面は黒釉が施されている。胎土は浅黄橙色をしていて、密である。外面には化粧がけはない。このことから、大塚Ⅲ期のものだと思われる。以上のことから、1は16世紀後半の遺物、2は16世紀中頃の遺物だと思われる。

4は柱穴8より出土した瓦質羽釜である。推定口径28.8cm、残存高5.8cm、推定鏝部径35.8cm、口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、端部でやや肥厚する。鏝部は貼付けで、水平に伸び、先端は丸みをもっておさまる。外面口縁部は横ナデ調整で、鏝部は貼付けの後、横ナデ調整をしている。内面は磨耗が著しいため調整は不明である。外面には煤が付着している。胎土は1～5mm程度の白色の礫を少量含む。色調は淡黄色である。内側まで火が通っていないので、断面に灰色の部分が見られる。このことから、15世紀後半のものかと思われる。

この他に、第87次調査地点からは、実測不可能の瓦器碗の小片、瓦質土器片、須恵器の堯片、土師器片等、中世のものだと考えられるものが出土している。この地点からの遺物の出土量は総じて少量である。

Ⅲ-5 有岡城跡・伊丹郷町 第100次調査

所在地 伊丹市宮ノ前2丁目200番地
調査面積 408m²(東西17m, 南北24m)
調査期間 平成3年2月20日～3月31日

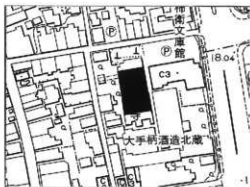


図17. 調査地点図(1/2,500)

調査概要 第100次調査は、浄土宗摂取山
光明寺の建替工事に伴って実施した。光明

寺は本堂と庫裡から成るが、両方の建物とも建替えられることになったため、本堂部分の調査費用については寺側が負担し、庫裡部分は国庫補助事業として行った。

光明寺の開基は、寺伝によると元亀二年(1571年)、江戸後期の郷土史家古野将盈がまとめた「丹丘寺院開基年考」では天正中とある。どちらが真実を伝えているのか判断できないが、それほど隔たりはない。また、同じく古野将盈編「有岡庄年代秘記」によると、宝永八年に再建されたという記事がある。この再建の記録については、発掘調査に先だって行われた本堂解体の折発見された棟札の記述と一致している。以上の記録から、元亀二年か天正年間に建てられ、何等かの原因により宝永八年に再建されたことが判明したので、発掘調査に際して、まず、再建前の本堂ほか建物の所在を知るためのトレンチを入れた。

遺構 試堀の結果、20～30cmの厚い整地層の下に粘土を貼った基壇の一部と大型の礎石が並ぶことが確認され、範囲を広げて本調査を開始した。本調査の結果、再建前の本堂(第Ⅲ期)が創建期のものではなく、その下層にさらに2時期(第Ⅰ期・第Ⅱ期)遺構面の建物が存在したことが確認され、再建される前の本堂は第Ⅲ期となることが判明したのである。以下、簡単に各遺構説明しておく。

第Ⅰ期(創建期) 調査区北半部に東西12.8m・南北12m以上で高さ20～30cmの基壇が検出された。基壇上に礎石は残らないが、抜き取り穴と思われる土坑が並ぶ。西側に基壇の張り出しがあり、これが入口と考えられる。全面に焼土と炭の層が堆積しており焼失したことが判明した。

第Ⅱ期 第Ⅰ期の本堂焼失後、基壇上に20cm程の厚さで盛土された上に建てられている。数個の礎石と10cm大の河原石が並ぶ方形の石組遺構が残る。方形石組遺構の内側には、5cmの厚さで砂が敷かれている。

第Ⅲ期 第Ⅱ期の面(第6層上面)の上に、盛土(第5層)をして基壇を築いている。基壇上には大型の礎石(礎石3～6)が3.2～3.3mの間隔で並ぶ。

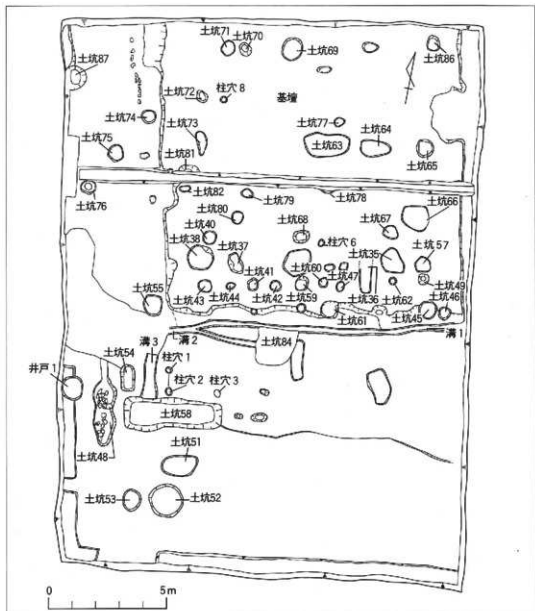


図18. 第100次第Ⅰ期遺構図

基壇上には焼土が堆積し、本堂跡には、焼けた瓦を多量に埋めた焼土土坑が3基(焼土土坑1～3)検出された。このような状況からみて、第Ⅰ期同様に本堂は焼失したものと考えられ、宝永八年の再建(第Ⅳ期)は第Ⅲ期の本堂が焼失したことが原因であったことが判った。

出土遺物 1～9は焼土層(図20、第13層)より出土したものである。1は手握ね成形の完形の土師皿(灯明皿)で、口径8.6cm、器高1.75cm、底部は丸みを持ち、内弯気味に立

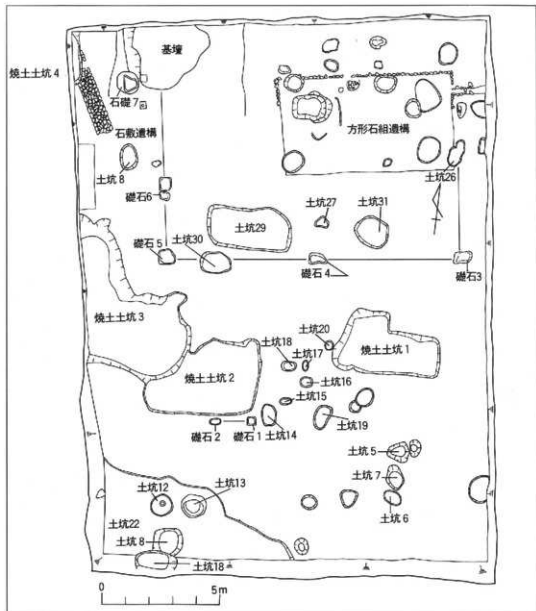


図19. 第100次第Ⅱ期遺構図

ち上がる。内面底部は不定方向のナデ、内外面口縁部はつまみ上げている。外面底部は指頭圧調整である。橙色をしていて、内外面共一部は煤が付着している。2は土師質の焼塩壺で、口径5.4cm、器高8.25cm、底径4.5cm。手握ね成形で輪積みの痕跡がみられる。平底で、口縁部はすぼまり気味で、胴部はやや丸みを帯びた筒型である。内外面口縁部は横ナデ、外面体部は指圧調整で、橙色である。3と4は砂目の唐津焼の溝線皿である。3は口径12.5cm、器高2.35cm、高台径4.3cm。やや幅広い輪高台で、内面見込みに砂目痕が

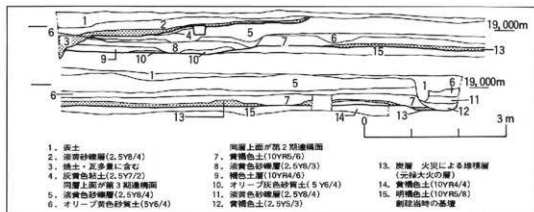


図20. 第100次北壁土層図

みられる。明褐色灰色の釉が施されている。4は推定口径12.0cm、器高3.1cm、高台径4.0cm、内外面共に長石釉が施され、高台端面に砂目痕がみられる。3と4は扁平な形で、内外面共に底部から体部で明瞭に屈曲する。5と7は瀬戸・美濃焼で、5は天目茶碗で、口径11.3cm、器高7.5cm、高台径4.5cm、高台内の削りが深い輪高台で、体部は高く立ち上がり、口縁部はやや内傾し、端部は再び外反する。高台周辺は露胎で、その他は黒釉が施されている。7は碗の底部で、残存高2.9cm、高台径4.8cm、高台は貼付け後回転ナデで、高台周辺は露胎で、その他は褐釉が施され、内面には鉄絵が描かれている。6は唐津焼碗で、推定口径10.2cm、器高5.2cm、高台径4.2cm。削り出しの輪高台で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。内面から外面体部上方にかけて黒褐色の釉が施されている。胎土は灰白色で密である。8は肥前染付磁器仏飯具で、底径4.3cm、残存高4.2cm。無釉の底部は円錐状に削られている。9は丹波焼播鉢で、推定口径26.7cm、残存高8.7cm、底径13.4cm、内面口縁部は肥厚し、その下部にヘラ描の凹線をもつ。内面口縁部から外面は回転ナデで、播目は6本単位の備目である。1～9は17世紀前半のものと思われる。

10、13は焼土層(図20、第3層)より出土したもので、肥前染付磁器である。10は網目文の碗で、推定口径9.7cm、器高6.6cm、高台径4.2cm、高台端部のみ無釉である。13は皿で、推定口径14.2cm、器高3.35cm、高台径5.8cm、高台は削り出しで逆台形をしている。体部は内弯気味に立ち上がる。内面口縁部から体部にかけて、型押しした波型文を施し、内面見込みには草花文を施している。10、13は17世紀中頃のものと思われる。

11は土坑8より出土した銅製の釘隠しである。縦、横11.5cm、厚さ0.2～0.3cm、中央には0.6cmの方形の穴をあけており、4方には葉の文様(ハート型)のすかしをあけてある。周囲は四つ葉のようになっている。錆ついているため緑色である。12は焼土土坑3より出土した菊花文棟差瓦で、径8.0cm、長さ12.2cm、厚さ1.4cm、花卉数8、淡黄色である。

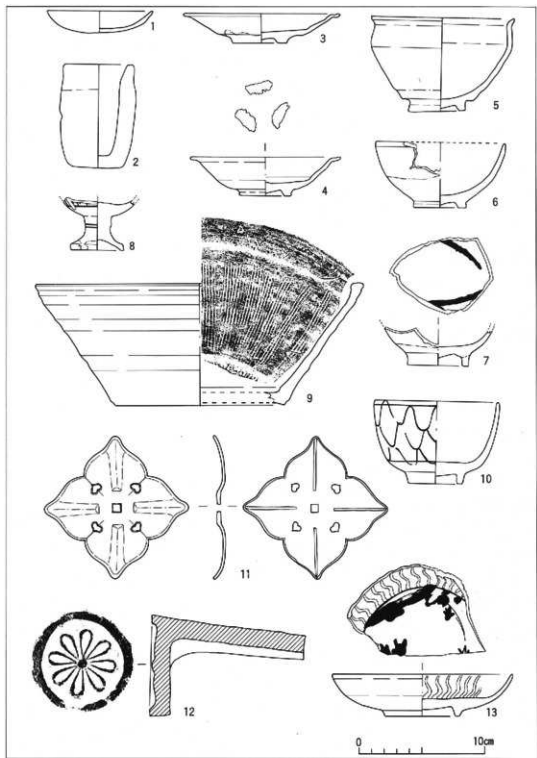
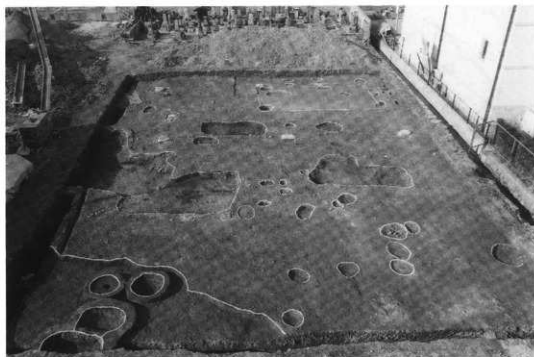


圖21. 第100次出土遺物



調査区全景(第Ⅰ期)



調査区全景(第Ⅱ期)

Ⅳ ま と め

この調査概報は、国庫補助事業として実施した有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査をまとめたものである。平成2年度末までに20箇所の補助事業の発掘調査を行っているが、今回は、この内の5箇所について報告した。しかし、報告した調査については、すべての整理作業を完了したものでなく、とくに第61次、第100次は今後機会を改めて正式な報告書をまとめる予定である。最後に各調査の所見を述べてまとめにかえたい。

第61次調査

第61次調査では、Ⅰ期・Ⅱ期の2次期の遺構面を検出している。この内Ⅰ期の遺構に焼土土坑(土坑54)がある。焼土土坑の性格については先に述べたが、少し付け加えておきたい。伊丹郷町における江戸時代の出来事については、幕末の郷土史家古野将盈がまとめた「有岡庄年代秘記」が詳しい。これによると、元禄時代に3度の大火事が伊丹郷町を襲っている。最初の火事は元禄元年(1688)に井筒町より出火し、竈数160軒が焼けている。次の火事は、同十二年(1699)に天王町より出火し、札場の辻まで飛火して下市場村まで焼いた。その被害は寺院6箇寺、酒家16軒を含めて、その他は「数不知」とある。そして最後の火事は、同十五年(1702)に中少路村から出火し、北ノ口町まで竈数439軒が焼けている。

各々の火事の出火地点と方向を絵図上(図2)で確認すると、第61次調査地点は元禄元年と同十五年の両方の火事の遺筋にあっている。今回検出した焼土土坑(土坑54)がどちらの火事に該当するのか判断難しいが、近くより出火した元禄元年の火事の可能性が高いと思われる。今後、周辺の調査事例と併せて検討したい。

第73次調査

鶴塚は有岡城惣構の南を守る砦の一部である。鶴塚砦の構造については、これまで全く判っていないが、鶴塚を中心に配置されたものと推定されている。今回調査では鶴塚の裾部にトレンチを入れたところ、江戸時代後期の陶磁器と共に5世紀前半～中頃の埴輪が出土した。埴輪が出土したことにより、鶴塚が砦構築の際に盛られたものでなく、古墳の埴輪を利用したことが明らかになった。これまでの調査でも、有岡城主郭部で、5世紀代の須恵器と埴輪が、また、上蔭塚砦推定地で実施した第21次調査においても古墳の周濠が発見されており、これは有岡城惣構内に点在していた古墳が利用されたことを物語っている。

今後は鶴塚を鶴塚古墳として登録し、古墳の形態や主体部について追究する必要がある。

第86次調査

第86次調査地点の東隣には、延宝二年(1674)建立の旧岡田家住宅が遺っている。旧岡田

家住宅は、伊丹の酒造家松屋与兵衛によって建てられ、18世紀初めには後方に酒蔵を増築し酒造を始め、次いで享保14年頃には大阪天満の出造り酒造家鹿島屋清右衛門に譲渡され明治を迎えている。天保十五年伊丹郷町分間絵図によると、調査地点は鹿島屋清右衛門の敷地の一部となっており、幕末期には酒蔵の一部に組み込まれていたものと考えられる。

調査では同地点で2面(Ⅰ期・Ⅱ期)の生活面を検出した。Ⅰ期が17世紀前半の初め、Ⅱ期が17世紀前半である。遺物には、中国明代の輸入陶磁器も含まれ、江戸時代初期からの町場であって富有層の居住する地域となっていたことが明らかとなった。

第87次調査

有岡城跡惣構は、東端に主郭、その西端には侍町、そしてさらに西側に町場に配置された構えとなっている。主郭と侍町の間には内堀が巡り、侍町と町場の間には大溝(江戸時代の絵図により確認)で各々隔てられている。この構造は、城の縄張り分類でいうと「梯郭式」のような仕組みとなっている。今回の調査地点は侍町の南端部にあたり、大溝跡と考えられ現在の石組溝から少し東に入った所である。調査の結果、15世紀～16世紀の堀立柱建物・溝・土坑など、を検出した。時期的には、天正二年以前の伊丹城期の遺構である。惣構の内の発掘調査は数多く実施しているが、中世の遺構を発見することは極めて稀で、当時の城の周辺の様子は全く判っていない。今回の成果は、有岡城の中世の姿を研究する糸口となろう。

第100次調査

発掘調査の結果、光明寺は二度焼失していることが判明した。最初の火事では創建時の建物が焼失し、二度目の火事では再建された建物が焼けたことになる。また、最初の火事の後、本堂基壇上に若干の整地層を盛って小規模な礎石建物が建てられていたことも判った。規模からみて、仮堂であったと推定される。これにより、創建期の建物(Ⅰ期)、仮堂(Ⅱ期)、再建の建物(Ⅲ期)の順に変遷し、Ⅰ期とⅢ期の建物が焼失したことになる。この度解体された本堂は、棟札によって宝永八年(正徳元年)に建てられたことが明らかとなったが、これは4代目(Ⅳ期)ということになる。

伊丹郷町では、江戸時代前期に何度かの大火にみまわれている。第61次調査の項でも述べたが、この間、当地点に被害をもたらしたと思われる火事は、元禄十二年(1699)と同十五年の伊丹郷町大火である。元禄十二年の大火では「寺院六ヶ寺、酒家十六軒」などが焼失している。出土遺物からみて、二度目の火事がこれに該当すると思われ、最初の火事は17世紀前半に起きた記録にない別の火事であると考えられる。

現在のところ、整理作業は完了していないため、これらの点については今後正式な報告書の中で再び検討を加えたい。

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第15集

伊丹市埋蔵文化財調査概報 I

1992年3月発行

発行 伊丹市教育委員会生涯学習部

社会教育担当

〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目

TEL (0727) 83-1234(内2453)

印刷 関西成光株式会社

TEL (06) 462-7501
